

# プラトン『国家』を現代日本に照らし合わせられるか

平成21年8月29日（土曜日） 嶋田 研志郎

592B「それはおそらく理想的な範型として、天上に捧げられて存在するだろう—それを見ようと望む者、そしてそれを見ながら自分自身の内に国家を建設しようと望むの者のために。しかしながら、その国が現にどこにあるかどうか、あるいは将来存在するだろうかということは、どちらでもいいことなのだ。なぜなら、ただそのような国家の政治だけに、彼は参加しようとするのであって、ほかのいかなる国家のそれでもないのだから」

→『国家』のハイライトシーン

## ○ 現代日本の政治の「現実主義」

- ・ 過度の自由になれた大衆におもねることしか出来ない

→自由が行き過ぎた大衆は何か隷属化する（2005年の郵政民営化・2007年の年金問題・今回の政権交代）

## ○ ソフィストの問題

- ・ ソフィストとは何か→古代ギリシャにおいてはトルコ西海岸やシチリア島など海外からやってきて、青年達に金銭と引き換えに弁論術や知識を授ける「職業的知識人」

→象徴的な言葉「反論することは不可能である」「弱論を強弁する」プロタゴラス

- ・ ソフィストの遺産→「ノモス（自然）とピュシス（掟・慣習）」

→人間の持っている自然的本性が法や慣習によって束縛を受けているという考え方つまり、社会契約説にも大きく影響していく

## ○ 現代のソフィスト

- ・ テレビのコメンテーターetc.

## ○ ソフィストにより陥れられた「政治」（古代ギリシャも現代も同じ）

## ○ 現代における「ソクラテス的な」生き方とは？

- ・ 国家の墮落を起こすのが「ソフィスト」→国制に関わらず常に追い風
- ・ 国家の墮落に反するのが「哲学者（愛知者）」→国制に関わらず常に向かい風
- ・ 風に惑わされず、常に本質を「想起」することが重要ではないか。

## <参考文献>

サイモン・ブラックバーン 木田元訳『プラトンの「国家」』ポプラ社

納富信留 『ソフィストとは誰か?』 人文書院

『哲学の歴史 1』 中央公論新社

関ひろ野 『プラトンと資本主義』 北斗出版